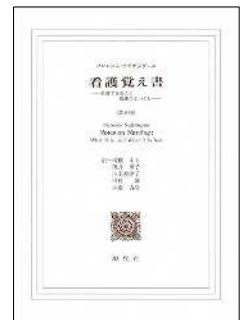




～『息子 覚え書』気づいたこと～

今年4月に都内に在住する息子が、帰宅途中に地下鉄駅から救急搬送された。自身身体に異常ありと判断し、周りの方々に助けを求めたようだった。搬送先の病院に駆けつけて、幸いにも事なきを得た息子が私に手渡し出された本が『看護覚え書』、「これを読んで待っていて。伝えるべき事は医師に全て伝えたから」と。いったい何がどうしたの?!と聞きたい胸の内であったが、何も質問してはいけない雰囲気であった。

『看護覚え書(第8版) 一看護であること 看護でないこと』2023年 現代社
フロレンス・ナイチンゲール著
湯楨ます、薄井坦子、小玉香津子、田村眞、小南吉彦訳



目次に、～おせっかいな励ましと忠告～とある。ああ、きっとここだ！おそらく読んで欲しかった章だと思った。前書きに以下のようにあるのが興味深い。

「この本は人の健康について直接責任を負っている女性たちに、考えるヒントを与えたいという、ただそれだけの目的で書かれたものである。女性は誰もが一生のうちにいつかは看護師にならなくてはならないのであれば、すなわち、誰かの健康に責任を持たなければならないのであれば、ひとりひとりの女性がいかに看護するかを考えたその経験はどんなにか価値のあるものになるであろうか。」

序章につづいて、換気と保湿、住居の健康、小管理、物音、変化、食事、食物の選択、ベッドと寝具類、陽光、部屋の壁の清潔、からだの清潔、おせっかいな励ましと忠告、病人の観察、と各章小さなセンテンスで具体的な内容が書かれている。この世で病人に浴びせる忠告ほど、虚で空しいものはほかにない。病人の状態について本当のところを知りたいのではなく、病人が言うことを何でも自分の理屈に都合のよいように捻じ曲げること、これは繰り返しいっておかなくてはならない～つまり、現実の状態について何も尋ねもしないで、自分の考えを押しつけたいということなのである～と。じつに耳が痛くなる思いであった。

また、「陽光」は、健康にも回復にも不可欠である～とある。この夏の40℃越えの酷暑日の陽光も身体にも心にも大切なものなのだろう。

師走。息子は相変わらず多忙で不摂生な生活をしている事だろうと思うが、少しの学びはあったと思いたい。そして私も、家族が健康で普通に暮らしている事が、この上ない安心と幸せなのだと気付かされた。

(野口)

『見えない世界で見えてきたこと』

石井健介
光文社
(2025 年)



石井健介氏を知ったのは、ラジオ放送で、見える世界と見えない世界、その2つの世界をつなぐ仲介者「ブラインド・コミュニケーター」と自ら名乗る彼に、「どうということ？」と興味を持ったのがきっかけだ。

駅の構内、トイレのアナウンス。「右が男子トイレです。左が女子トイレです」と聞こえ、目の前が真っ暗だったら自分が今、右に向いているかも分からない。パニックになってしまうだろう。慣れ親しんだ自宅へのいつもの帰り道も、段差の場所まで覚えているだろうか？想像してみてください。

「もしも明日、目覚めたら両目が突然、見えなくなっていたら…」そんな状況がリアルに起こったのが、石井さんだ。「目が見えていたって見えていなかったって、僕には大切なものが見えていないのだ」と著者は語る。なんて、素直な人だと思った。泣きっ面に蜂を追いかけていたら足を踏み外し、落ちた先が虎の穴。つまり続きでも好奇心が助けになること。半年で前向きになっている石井さんの逞しさ。障害者に自分になることへの抵抗感。拒否していた白杖を持つきっかけになったエピソードなど。

私ならこんな時、どうするだろう？と、自分に問いかけながら、夢中で読んでいた。読書中、想像力を刺激され続けた。実際に突然、視力を失う経験した著者だからこそ語られる率直な思いは、リアルな手触りがある。本を読み進めるうちに、石井さんのシチュエーションを私まで追体験をしているような感覚になっていく。

どん詰まりになっている人。明日が来るのが怖い人。お先真っ暗な人にこそぜひ、読んでもらいたい。見えない世界を歩く。それでも人生は続いていく。真っ暗闇のトンネルの先に、進む勇気を分けてもらえた気がした。

(畑)

『ドイツ人は飾らず・悩まず・さりと老いる』

サンドラ・ヘフェリン
講談社
(2025 年)



『本書は日本で何かと話題になる「老い支度」にドイツ人はどのように向き合っているのか。ドイツ人へのインタビューを通して、私なりに感じたこと、考えたことを交えつつ、ちょっとしたヒントをまとめたものです。』本文より。

著者は日本人の母親とドイツ人の父親のもとに生まれた。ドイツのミュンヘンで育ち、23歳の時に日本に来て、日本での生活を楽しんでいると、弟も日本に住むようになった。父親が亡くなり高齢の母親が1人ドイツに残ることになったため、3人で今後の事を話し合い母親には日本で暮らしてもらうことにしたが、母親は心変わりをしてドイツにいたことになった。「老後のことなんて、考えたことがなかった」著者が、日本に住んでいるドイツの知り合いにインタビューをしてまとめたのがこの本だ。

日本人とドイツ人の違い、似ているところが書かれて読者が考えられるようにテーマごとにまとまっている。日本人だからドイツ人だからではなく、生まれた地域や環境、異文化(外国人)の対応、宗教のあるなしなどで考えは違うと感じた。

私が驚いたのは「福祉国家であるドイツでは介護に関しても国のケアが行き届いている」と思っていたけれど、親の介護は日本と同じで女性が担っていたことだ。ドイツは国境があるので(行き来は自由)外国人が働きに来ている、ドイツ人より賃金が安いから。そして親のケアのため仕事を辞めるため、女性の老後の貧困の問題が起きている。

日本ではよく「ぴんぴんころり」と言われるが、ドイツでも同じように元気で自由に生きてパタッと死ねればいいと書いてある。できるだけ周りに迷惑をかけない方法を考えて、元気にお別れできればよいと思っている。

(あや)

『明治のナイチンゲール 大関和物語』

田中ひかる著
中央公論新社
(2023 年単行本)
(2025 年中公文庫)



大関和(ちか)が、盟友鈴木雅(まさ)と共に看護婦(現在の看護師)の地位確立を目指す物語だ。

二人は共に士族の娘として生まれた。現在放送中の朝ドラ「ばけぱけ」で、「父上は立ち尽くしておられるのよ」というセリフを聞いたが、士族は時代の変転の中で戸惑い、没落して物乞いになる者も少なくなかったと言う。和も雅も小泉セツより10歳程年長、和は離縁で、雅は死別で、シングルマザーとなるが、和が娼妓になるかならないかは紙一重であったと言う。女中をしながら英語塾で学び、鹿鳴館の通訳になり、その後看護婦へと転身していくが、和の母は、鹿鳴館の通訳こそ喜んだものの、女中も看護婦も士族の娘がやる仕事ではないと嘆いた。他人の体に直接触れ、時には感染して命まで落とすような看護の仕事は賤業とされ蔑まれていたのだった。

情熱的な和は看護に献身の心で臨み、自己犠牲もいとわない勢いだった。一方で冷静な雅は、看護に女性の経済的自立を託していた。とは言え、雅も目前の天然痘患者を救うため、アメリカ留学の好機を捨ててしまうという慈善心の持ち主だ。

対照的な二人に共通するのは、専門的な知識と技術を備え、訓練を受けた看護婦、トレインドナースという存在を世に認めさせるというプライドではなかったか？和の孫は「士族意識から来るものか、終生エリートとしての誇りがあり…気位の高さは一貫してあった」と回想している。当時、出自に誇りを持つのはむしろ自然であったと本書も解説する。

著者の田中ひかる氏は歴史研究家で、月経や生理用品といった女性の身体から、医療へとテーマを広げている。2026 年朝ドラ「風、薫る」は本書を原案に描かれる。ヒロインは二人だそうで、和と雅の相棒物語が期待される。

(K ナカノ)

『燕は戻ってこない』

桐野夏生
集英社
(2022 年単行本)
(2024 年集英社文庫)



主人公リキは地方出身。地元北海道の短大を卒業し、東京へ出てきたが思うような仕事に就くこともままならず身分は非正規職員。コンビニのコーヒーを買うことも躊躇する状況だ。

そんな彼女に舞い込んだ「代理母」ビジネスへの誘い。「卵子提供」のつもりが、依頼者に外見が似ていることから「代理母」を勧められる。様々葛藤はあるものの結果的には引き受ける。貧困ゆえに。

ところが、当初はビジネスと割り切り、腹の中で育っていく「芽」を不気味にも思っていたのに、思いもよらぬ感情が生まれる。そして依頼人側の思いもさまざまである。

「自分の遺伝子を継承したい」夫。「産めないから、だれかに産んでもらう」妻。だが妻の心境は複雑だ。この夫婦の場合、精子は夫のものだが卵子はリキのもの。妻は生物学的には他人であることから蚊帳の外、と感じながらも「産む」リキに寄り添う思いもある。

そしてもう一人の登場人物である夫の母親。このセリフには唸らされた。「息子の遺伝子を継いだ子どもがいなかったら、私やあなたが死んだら遺産はすべて彼女(妻)のものになる。彼女が死んだら、彼女の家族にわたることになる」。なるほど。だからどうしても息子の生物学的子どもが必要なのか……。子どもを持ち、育てることの根幹を考えさせられる。

自分の居場所を失う行動をとるリキにイライラする場面もあったが、リキは無事に双子を出産する。さて、それからの登場人物たちは…。

子どものいのちは誰のものなのか。言うまでもなく子ども自身のものだろう。しかし、何も決めることができない、意思を示すことができないときは？

(佐藤)

第 32 回「ブックトーク&井戸端会議」 さいたま市女性学研究会(ゆい)主催

自分と家族や身近な人の老いと別れや異文化と共生することとは、どういうことか考えよう。

2026 年 2 月 1 日(日) 14:00~16:00

パートナーシップさいたま第 3 会議室 定員 24 名

ドイツ生まれ、23 歳で日本に来て、30 年近く住んでおられるサンドラ・ヘフェリンさんが「ドイツ式、幸せな歳の取りかた」を記した『ドイツ人は飾らず・悩まず・さらりと老いる』を紹介する。日本との考え方の違いを知り、老いや死を話し合いたい。合わせて、私たちの日常生活で外国人と接することや、異文化を理解すること、そして共生するとはどういうことかも考えたい。ご参加をお待ちします。



参考図書:『ドイツ人は飾らず・悩まず・さらりと老いる』 サンドラ・ヘフェリン著 講談社(2025 年)

参加ご希望、お問い合わせは、さいたま市女性学研究会事務局までご連絡ください。参加費 200 円。

事務局<磯部> 電話:048-641-3765 Eメール: i.sachie@nifty.com

■ パートナーシップさいたま耳寄り情報 ■

第5回パートナーシップさいたまフェスタ 「ジェンダー平等を実現しよう」

▶開催期間 令和8年1月18日(日)~2月1日(日)

▶開催内容

①基調講演 **定員となりました**

「こころとからだのホルモンのこと」講師:高尾美穂医師

令和8年1月18日(日) 14:00~15:30 生涯学習総合センター 多目的ホール

②主催プログラム **令和7年12月10日(水)9時から申込み開始**

メイクで「あなたらしさ」を見つけよう

令和8年1月23日(金) 10:00~11:30 パートナーシップさいたま 会議室3

③出展団体によるプログラム

④特設サイトでのオンライン企画

- ・これまでのオンライン講座の再配信
- ・さいたまマイクボス共同宣言事業者からのメッセージ
- ・男女共同参画施策の紹介 等



お申込み・詳細

さいたま市男女共同参画推進センターホームページをご覧ください。

「ゆい」2025 年冬号 第 12 号 (2025 年 12 月 1 日発行)

編集 さいたま市女性学研究会(ゆい)

マーク、題字 野田

<事務局>磯部幸江 電話 048-641-3765 Eメール i.sachie@nifty.com

発行 さいたま市男女共同参画推進センター | パートナーシップさいたま

〒330-0854 さいたま市大宮区桜木町1丁目10-18シーノ大宮3F 電話 048-642-8107

<https://www.city.saitama.jp/006/010/002/index.html>

